

## 書評

若松良樹著

### 『自由放任主義の乗り越え方——自由と合理性を問い直す』

(勁草書房、2016年)

中村隆文

#### 1. 本書の概要

本書は、「自由放任主義」と「パターナリズム」という両極端ともいえる二つの立場を分析・批判しながら合理性概念を見つめなおし、中庸としての「知的な制度」の可能性を探究するものである。

本書において特徴的であるのは、批判対象を「キマイラ」として分析する際のその分解的手法である。たとえば、自由放任主義を批判する際、著者は、本来相反する「主知主義」と「主意主義」とが、自由放任主義の前提である「ホモ・エコノミクス仮説」と「顕示選好理論」と結びつき、それぞれが歪な結合をしていると指摘する。そもそも主知主義とは、ソクラテスやプラトン以来の「知識は善なる在り方を示している（そして知識があれば善を実現できる）」とみなす立場であるが、ホモ・エコノミクス仮説においてそれは「自分が自分のことをきちんと理解して正しい選択をすれば（たとえその目的が喫煙や暴食であっても）、自分にとっての善や行うべきことを実現できる」という一人称の合理性を形作っている。それはさらに「喫煙や暴食を自律的に選択したとすれば、それが本人にとっての善（自己利益）である」といった主意主義的な顕示選好理論と結びつき、「喫煙や暴食であっても、それが自身にとっての善であると自覚していれば、本人がそれを選択することは合理的である」という無謬的な主観主義的合理主義の形態をとることとなる。しかし、これは異なるロジックが歪に組み合わさった産物、すなわちキマイラであって、一見すると説得力があるようにみえても、時間的に変化する価値観や選好、個々人の流されやすさやバイアス、実際にそうした不完全な合理性のもとで起こっている失敗や後悔に言及できていない点を踏まえると、現実の人間に関する誤解や欠点を内包した不完全なものといえる（117-119頁）。

では、昨今流行りのリバタリアン・パターナリズム（以下LP）をフロントランナーとするようなパターナリズム陣営こそが正しいのかといえばそうではない。パターナリズム陣営は当該主体の行為プロセスを客観的に理解するため三人称の合理性を重視しつつ、それを欠落するような「非整合的」あるいは「矛盾した」選好をもつ主体に対し、「この人は合理的でなく自己利益を逸しがちであるので介入する必要がある」と主張するが、そうであってもその人自身にとっての善を示すような一人称の合理性の欠落までも証明したことにはならない。しかし、パターナリズム陣営は、そうであるにも関わらず、その人自身の利益のために介入することの正当性をそこに見出してしまふ。ここでのパターナリズムは「内的整合性の失敗の実証を、自己利益の最大化の失敗にすり替える」という誤謬を犯しているといえる（206頁）。

こうした誤りは、人間を「合理的」とみなすか「非合理」とみなすかという極端な人間理解ゆえの産物として描かれているが、著者は「限定合理性 bounded rationality」の多面性に着目し（制約条件付き利益最大化合理性として、あるいは、バイアス含みの不完全な合理性として、さらには、ゲーレンツァーの「環境適応的な生態学的合理性」として、など）、個々の主体それぞれの傾向性と状況とをきちんと現実的に踏まえた「知的な制度（への改善）」の必要性を訴えている（第8章）。

#### 2. 本書に関するいくつかの批判点

著者の分析的手法は非常に手際のよい鮮やかなものであり、哲学・経済学・経営学・認知心理学などから多角的に「合理性」を掘り下げている点でも学際的で特色ある研究といってよい。ただし、批判対象をシンプルに分類しすぎている感もあり、やや誤解を招きかねない箇所もあるので、下記二点について言及しておきたい。

まず第一に、本書前半での自由放任主義への批判において、ホモ・エコノミクス仮説や顕示選好理論そのものがキマイラの構成要素であるかのようには語られている点には注意する必要がある。もちろん、それぞれの理論には人間理解に関する欠点や限界もあるわけで、それらに対する著者の指

摘それ自体は適切ではある。しかし、今現在、それぞれの経済理論家たちはそうしたことを踏まえつつ——なぜならその理論的限界を指摘し合ってきたのはほかでもないそうした経済学者たちなのであるから——その使用のもとで得られる知見を取捨選択しつつ限定的に利用しているのであって、それらを一緒にたまとめて、「人間そのものに関する極端な合理主義」を構成するかのような記述的説明は、それぞれの理論家たちにとってみれば納得できるものではないだろう。批判されるべきは、異なるそれら二つの理論を「自由放任主義」という御旗のもとキマイラ的に融合しつつ利用しようとするような政治的スタンスの方である。

第二に、LPに対する批判において、LPが言おうとしていないこと（あるいは、LPが課題として向き合い解決しようとしていること）をLPそのものに内在する難点として論じているかのような点である。著者は、LPは内的整合性を欠落した選好体系をもつ主体に対し、それは「非合理」ゆえに「自己利益実現の失敗」と決めつけて介入するものとみなし批判しているが（119-200頁、206頁）、LP側からすればそれは通常のパターナリズムに対する批判ではあっても、自分たちへの批判とみなさないであろう。たしかに、矛盾した振舞いゆえに「失敗」「後悔」を伴いがちなイシューにおいて、LPは（介入ではなく）誘導の必要性を訴えはするのだが、LPはそうした人々全般に対し、恒常的・一律的な介入を訴えるものではない。だからこそLPは個々人にオプト・アウトの選択肢を保障することには肯定的であるし、ハードなパターナリズムを回避しようとするためのいろんな工夫を模索する（ナッジなど）。中庸を提唱する著者はLPを批判しているが、そのスタンスは実質上LPと大差ないように見えるし、それは著者自身も認めている（296-7頁）。

もっとも、著者によると、LPはわれわれの限定合理性を「欠点」とみなして介入の口実としたがるのに対し（本書第七章）、著者自身はそれをポジティブな可能性のもとでとらえているとのことであるが、本当にそれはLPとの間での差異として決定的なものなのであろうか。たしかにLP

がナッジなどをもって誘導を試みるケースでは、人間本来の限定合理性を欠点としてみなし非合理的なわれわれを操作しようとしているにしても、それ以外のケースにおいて「人は非合理的なのですべからく誘導されるべき（さらには介入されるべき）」とまでLPが主張しているようにはみえない。本来、そうした一方的介入に抵抗するためのLPであり、そのためのリパタリアニズム的な権利保障を提唱していたのではないだろうか？

### 3. 本書の意義

とはいえ、表向きはソフトにみせかけながらも、実質上（抵抗しがたい心理的誘導などを駆使した）ハードなパターナリズムとしてLPが今後君臨する可能性はあるだろうし、著者が示唆するその懸念は十分理解できるものである。ただ、LPの代表的論者であるサンスティーンの語り口ですら、極端なものから穏当なものへと、また、社会全般的な誘導・操作の必要性から、個別的・個人的イシュー毎への必要性へと論調も変わっている（この点は著者も言及している）。それゆえに、著者による中庸的な提言がそうしたLPとどう違うのかは、やはり本書の議論だけではやや分かりにくいのであるが、今後LPの社会的影響力が強まるなか、そこで著者とのスタンスの違いが明らかになるかもしれない。そしてそのときこそ、本書において詳細かつ丁寧に示された「中庸」のあり方が重みをもつことになるだろう。本書はそうした起こり得る事態に対する予防ワクチンとして、やはり多くの人に読まれるべき学術的価値をもったものである、と結びつつ、本書に関するレビューとさせていただきます。